学校から社会への移行過程において〈気になる若者たち〉(YC)がクライシス状況から次へと向かっていくその背景にあるもの

子ども共育サブプログラム

山嵜 千華子

【指導教員】安藤聡彦　長嶺宏作
【キーワード】〈気になる若者たち〉（YC）　〈発達障害グレーソーン〉　移行過程　自己回復力　リジリアンス

１．課題設定理由

近年児童生徒の不登校問題はより顕著に、そして「８０５０問題」と言われているようにひきこもりが長期高齢化しており親子が社会的に孤立し生活が成り立たなくなるといった深刻なケースが社会問題化している。不登校やひきこもりに至る原因は、いじめや職場での対人トラブル、本人の精神疾患によるもの、経済状況や家族問題よるものなど様々な要因が重なって起こる。その数ある要因の１つに発達障害との関連も見過ごせないという指摘もされている。精神保健福祉センターでのひきこもり相談来談者の調査では全体の 30%弱ほどに発達障害の診断がついたという報告があり、このような数字が示唆するのは、発達障害の特性のいくつかがひきこもりとの親和性を持っているのではないかということだ。（厚生労働省、2010年）また、「ひきこもりが長期化するケースでは、不安障害と発達障害への対応が一つの重要な課題になるものと考えられる」と精神科医の近藤は述べている。（近藤、2010年）長期化するケースも元々ひきこもりが始まったのは思春期から青年期である。この思春期から青年期という学校から社会へと移行していく実に不安定な時期は、不登校やひきこもりというクライシス状況に若者が陥りやすい時期でもある。そしてひきこもりが発達障害と関連があるケースも一部で示唆されている。しかしながら発達障害の診断の有る無し、自覚の有る無しに関わらず多様な人々が存在する世の中においては、誰しも人間関係のトラブルや感じ方の違いでクライシス状況に陥ってしまう可能性がある。このような社会問題にもなっている不登校やひきこもり等の学校から社会への移行過程で起きやすい若者のクライシス状況を知り、その状況から次の行動を起こさせる背景には何があるのかを本研究では探っていく。本研究の対象者として〈発達障害グレーゾーン〉とされる若者（誰しも発達特性はあり、個人差もある。そして濃淡のグラデーションがあるため一概に言い切れるものではないが、研究対象の臨床像をイメージしやすくするためこの表現を使用した）等の〈気になる若者たち〉（youth of concern; 以下YCと表記する）が学生生活や社会生活の中で迷いや困難に遭遇し、それを避けて通ることができない場合、いかにその状況の中で自身が納得しよりよく生きることへと己の道を築いていくのかについて、当事者なりの対応方法やマインドセット、どのように考え行動したか、当時を振り返って語っていただき、それを聴き取り調査する。社会との折り合いも踏まえてクライシス状況から次の行動を起こす上で関係してくるものは何なのか、その気持ちを湧き上がらせる要因や条件にはどのようなものがあったのかを捉え記述していく。

また、移行支援経験の有る無しがその後の思考傾向や行動にどのような影響があるのか個々のインタビュー対象者の経験の中から読み取れることを比較し考察する。そこから得られた知見を、現在停滞中（模索中）の者への今後に活かせるようなヒントとして実践に繋げたく思う。

そもそも今回の研究に至った経緯は、筆者が埼玉県の県立高校の教員として直接関わってきた生徒の内、YCに当たる生徒の卒業後が気になったことから始まった。高等学校を転学・退学・卒業した後のYCである若者が社会人としていかに社会と折り合いをつけながら生き、困難をどう乗り越えていくか等についてなされた研究はまだそれほどない。そこで高校時代から知る彼らの卒業後を追跡インタビューし、そのライフヒストリーから浮かび上がってくる移行過程において影響を与える要素は何かを模索していきたく思った。

１回目インタビューさせいていただいた昨年当時、彼らは高校３年間を経過し、それぞれの進路を歩む青年期の若者であった（２回目インタビュー対象の２名を含む計４名）。彼らは医学的な診断の有る無しに関わらず学習面・行動面で気になる面のある青年である。在校時の困りごとや進路選択に至った経緯なども含め、様々な観点から過去・現在・未来という時間軸でそれぞれの状況やその時の考えを聴いていった。その中で、高校在学時や卒業後にクライシス状を経験し停滞状況にある（あった）若者が数名おり、次にどう人生の方向をもっていく

べきか苦慮している様子を知った。

昨年までは関わった元高校生を中心にインタビューしてきたが、これまでに同じような経験（移行過程におけるクライシス状況の経験）のあった者で、停滞状況から次の行動を起こすことのできた先人に何か知見を得られないかと考えた。そこで、移行支援事業を経由し社会人となった若者２名を紹介していただき、インタビューをさせていただくこととした。

２．〈気になる若者たち〉（YC）の定義

今回のインタビュー対象者を表す表現として、診断されていない発達障害（DD）を持つ学童のことを医療専門家が「気になる子ども」（KK: children of concern）と概念化し発信している（2015、大河内）ことから、それに倣ってYCと便宜上表現させていただく。ここで言うYCは「いわゆる医学的診断のない＜発達障害グレーゾーン＞にあるのではないかと推察される若者たちや極めて軽度の知的障害のある若者たち」を臨床像として想定した。今回のインタビュー対象者は医学的診断を受けている者もいるが、その特性は極めて多様で広がりのあるものである。そこで対象者の臨床像のイメージは設けながらも濃淡の程度はある程度広く包摂し、学校から社会への移行過程において遭遇するクライシス状況に焦点を当てて研究の対象とさせていただく。

３．インタビューの概要

（１）対象者

昨年度からインタビューを行わせていただいている高校時代から筆者が関わってきた若者２名および都内にある自立訓練事業所と就労移行支援事業所を併設する事業所（A 事業所とする）を経由し就職した方で、就職して２年程度以内の２名の若者にインタビューを行った。インタビュー対象者についての一覧を以下に示す。

インタビューイー ※年齢は２回目インタビュー時点	経歴	インタビュー日時	インタビュー場所
A事業所出身 Xさん 21歳男性 ※就職後も３か月間はトライアル雇用期間で、A事業所の利用者である。その為、インタビュー時点も仕事の休みの日に通所している。	中学校（支援学級）卒業→特別支援学校（高等部単独校）卒業→A事業所（自立訓練２年、就労移行１年半）→就職して２か月	・2024年 11月16日 10時～11時	・都内 A事業所
A事業所卒 Yさん 26歳男性 ※前出のXさんと同じA事業所出身かつXさんの職場の先輩でもある。	中学校（支援学級）卒業→高等特別支援学校卒業→都内通信制高校サポート校卒業→A事業所（自立訓練２年、就労移行１年半）→就職して２年２か月	・2024年 11月16日 11時～12時	・都内 A事業所
B高校卒 αさん 20歳女性	中学校卒業→高校（定時制・単位制）卒業→就職して９か月	・2023年 ９月29日 17～19時 ・2025年 １月4日 10時45分～12時	・埼玉県内ファミリーレストラン ・都内ファミリーレストラン
B高校卒 βさん 20歳男性	中学校（支援学級）卒業→高校（定時制・単位制）卒業→大学進学→１年次修了後大学を中退し、現在就職に関わる資格取得を目指す。	・2024年 12月28日 14時～17時 ・2025年 １月８日 13時半～14時半	・埼玉県内喫茶店 ・埼玉県内喫茶店

（２）方法

インタビューイーのライフヒストリー、特に学校から社会への移行過程について半構造化法によって聞き取っていく。その中でとりわけクライシス状況を伺い、その状況にいかに対応し次の行動へと向かっていったのか、またその時の内面的な動きとしてはどのような感情があり、その時に何を考え行動へと繋げていったのか、行動に移す際の他者との関り等についてインタビューし、関係する要素を浮かび上がらせていく。それを浮かび上がらせ考察していくことで、現在クライシス状況にあり停滞している者へのヒントが得られるのではないかと考えた。また、学校教育のみを経て社会に出た者と学校教育に加え移行支援を経て社会に出た者では、困難に遭遇した際の物事の受け止め方やその困難への対処方法において違いがあるのではないかと筆者は考えた。そのため、対象者を高等学校卒業後の２名と学校教育後に移行支援機関を経た２名という２つのカテゴリーをもって設定することとした。

これまで歩んできた人生は人それぞれで異なるため個々の事情を聴きつつも、ある程度同じような質問項目の枠組みでインタビューすることで、大枠で比較していくことのできる半構造化インタビューの形式でデータの収集を行うこととする。以下に具体的なインタビュー項目を示す。（紙面の関係で移行支援機関を経た若者へのインタビュー項目のみ記載）

① A事業所（自立訓練・就労移行支援）に進んだのはなぜですか。
② どのようにして現在お勤めの会社とは出会い、働くことになったのですか。任されているお仕事は具体的にどのようなことですか？
③ 仕事をする中で、あるいは社会人になってみて大変なことはどんなことですか。もしA事業所に行かず、高校（高等特別支援学校等）卒業後に今と同じ仕事に就いていたと想像してみると、いかがですか？その場合のご自分はどのような社会人生活を送っていると思いますか。A事業所でのどのような経験が現在の成長に活かされていると思いますか。
④ 困難な状況の時、どのように考えたり行動したりしていますか。ご自分なりにどのような対処をされているか教えてください。
⑤ これまでの人生の中でうまくいかないことがあって停滞していた(どうしたらいいか分からず行き詰まってしまった)と思われるご経験はありましたか。もしございましたらその時のことをお話しいただけますか。その状況からどのようにして次の行動を起こすことができたのですか。
⑥ 今後、挑戦してみたいことややってみたいことなどは何かありますか。この先どんな生活をしていたいですか。

４．インタビュー内容

【高等学校卒業後の２名】

αさん：〈学生から社会人となった現在までの概要〉

αさんは定時制高校を３年間で卒業する予定で入学したものの４年間かけて卒業し、スーパーに就職した。就職と同時に実家を出て現在は会社の寮で生活している。高校生の時は、母親（母子家庭であった）との折り合いが悪く早く実家を出たいと考えていた。１回目のインタビュー時に当時の家庭状況のことを語る場面では「（母親が食事の用意を）もうずっとやってなくて」「だからもういいやってことで作らないのは分かってるし」「自

分の食費とかは自分でやってて、結構すぐ（アルバイト代が）無くなっちゃいました」「（母親は）お金のことに関しては、やっぱり面倒は見てくれなくて」と述べていた。１回目インタビュー時点で食事は摂れているか聞くと「今は今の担任の先生に家庭のことを言って、市役所からもらってる。寄付の食材を届けてくれる。そうやってまず担任の先生に言ってから相談の先生にその内容が入って、その時にいろいろこういう制度があるのでって。とりあえずは毎日食べれてる」と語っていた。現在は母親との関係も良くなってきて適度に寮と実家を行き来している様子であった。実家に頼ることがあったかを聞いた時に、「最初の頃は（お金が）足りなくなったので、お母さんとかに結構もらってました」ということや配属されてすぐの頃高熱が出た際は「そのまま実家に戻って休んで」という語りから伝わってきた。今ではときどき実家に行って料理を振舞ったりしているそうだ。

〈クライシス期〉

人生のクライシス状況は高校１年生後半～３年生の時であった。基本的生活を安定させるための家庭環境が整っていないこともあって、食事はまともに摂らず昼夜も逆転しかけていた。当然学校生活も崩れがちとなった。２年生頃からは欠席も目立ち、単位も軒並み修得できない状況に陥った。あまり学校に行っていないと友だちからも心配されるが、自分のことを友だちがよく思っていないのではないかと逆に疑心暗鬼になってしまった。そして余計に学校から足が遠退いてしまった。その時のことは「友達はそんな風に思ってないんですけど、私がそう思っちゃって、そこの中でちょっと距離を置いちゃった。それがなんか行きたくないみたいな」という語りや「（たまに学校に行くと、友だちが）思ってないこと（自分をよくないと思う事）もそれも気にしちゃう。絶対思ってないこともどうしてもマイナスに捉えちゃう」といった語りで聴くことができた。さらに当時のどうしようもない辛さを「自分の中では結構辛いところもあって、で、なんか3年生になって距離をもう結構感じ始めちゃって。泣きたいけど、トイレで泣いたりとかそんな感じ。1日に3・4回くらい泣いて、泣いたのを見られないようにしてっていうのがあったりしました」と辛い時期を思い返しながら語ってくれた。学校へ行かなくなり３年生の１０月に担任からの電話で、あと4・５回欠席すると３年生での卒業ができないことが伝えられた。それでも学校へは行けず、欠席日数が単位修得不可レベルまで達した為、３年間で卒業する予定は崩れ、４年目の高校生活を送ることとなった。

〈クライシス期からの脱出〉

３年間で卒業できないことが、彼女の祖母に伝わった時の状況をαさんはこう話した。「おばあちゃんに4年生になること聞かれたら、うん、なんか結構叱られたわけです。それで自分の至らなさっていうのが、…反省して。（おばあちゃんから）これからはどうしていくの?みたいな。辞めるの?行くの?みたいな感じになって、行くって言って」というやりとりがあったそうだ。当時は祖母の家によく行き食事などの世話や話を聴いてもらっていたらしい。３年生の冬休み明けからはその年度の単位は取れないことを知りながらもαさんは学校へ行くようになり、３学期の期末試験にも臨んだ。なぜそのような行動が起こせたのかを２回目インタビューで訊ねた時、一番の存在は祖母を挙げ、「そう、そのとにかく（おばあちゃんが）話を聞いてくれたし、もちろんちゃんと怒ってくれたし、自分で考えても結果は良くならないから、まずは前もって話して、それで改善策を（おばあちゃんも）考えたりとかできるからねって」と言ってもらえたそうだ。また、祖母だけでなく周りの人へ恩返しをしたいことを「やっぱり周りの支えがあったからだと思う。こんだけやってもらってるのに、自分は何も返せてないっていうのもあったし、いろんな人に支えてもらって、先生もそうです。あと、家族もそうです。友達も支えてくれてたんです」と語った。

〈将来への展望〉

１回目のインタビュー時は、高校４年次生で内定が決まっている時で、「今は就職したらとにかく長く勤めたいので、長く勤めてキャリアアップを目指したいから、いろんな資格取って。で、チーフになって人をまとめる人になりたい。」ということや「お金を頑張って500万円くらい貯めたとしたら海外に移住して永住したいです」ということも語っていた。２回目インタビューの際は寮を出て、いずれは恋人と生活したい事が語られた。

βさん：〈学生から社会人となった現在までの概要〉

βさんは中学校（特別支援学級）を卒業し定時制高校へ進学した。その後自宅から通える大学（福祉学部）へ進学したものの学業に付いていくことが困難で１年間で大学を退学することとなった。現在はアルバイトをしながら旅行関係の資格や運転免許の取得を目指している。

〈クライシス期〉

ちょうど昨年１回目のインタビューをした頃、本人とは別でその前日に保護者にもインタビューを行わせていただいた。保護者からは本人が大学での単位修得が困難で４年間で卒業できるか危ぶまれる状況の為、このまま大学を続けるか否か本人含め検討していることが話された。翌日の本人インタビューからも大学を続けるかどうするかを悩んでいたことが伺えた。大学生活がどうかを訊いたところ「やっぱり大変ですね。なんか大学って僕

のイメージと全然違って、違うなって思いました」「課題やって、寝る時間が遅くなるじゃないですか。睡眠時間が削られますよね」「やっぱり大学ってテストで点取らないと単位もらえないじゃないですか。そこがやっぱりきついですよね」というような答えが返ってきた。もちろん大学生活で楽しいことやアルバイトでは手腕を発揮してアルバイトのリーダー的立場にあること、長期休みには一人旅をして、様々な経験をしたことや旅先でのかけがえのない出会いがあったことなども話してくれた。ただ、別の話題の時もふと思い出したように「なんでしょう、やっぱり大学って難しいですよね。やっぱり授業の内容もそうですけど、レポートと課題のその量もそうです」と語ってきたことや高校生の進路選択時の後悔についても語る節があった。本人としては好きな旅行に関する専門学校を高校２年生までは希望していたものの父親の意見に促される形で高校３年生からは大学進学の方へと進むことになった。当時なぜ進路先を変更したのか問うと、「僕、最初旅行関係の専門だったんですけど、やっぱりお父さんの方が…大卒っていう資格を与えてあげたいっていう思いが強いみたいで」という答えが返ってきた。さらに自分の希望を父親に対して主張しなかったのかも問うと「そうですね、やっぱ難しい面はあります」との回答であった。そして進路選択の際に後悔している事については、「やっぱり進路が専門から大学に変わったじゃないですか、僕。その時にやっぱりもうちょっと担任とか含めて進路指導の先生含めて話し合いしたかったなってこともあります。時間かけたかったなって」と語っていた。

〈クライシス期から現在〉

２回目インタビュー時、この１年はどうだったかを訊いたところ「まあいろいろありまして。大学は3月、やっぱりきつくて福祉の仕事に就くのがちょっと難しそうに感じちゃって。ちょっと辞めてしまって」という語りから始まり、現在は運転免許の取得と共に旅行業務取扱管理者の資格を取得するために都内の資格専門スクールに通っていること、これまでも続けてきたアルバイトを続けて生活していることが語られた。どのような経緯で大学を辞めるに至ったのかについて、βさんは「まあ単位もそうなんですけど、難しくて、そしてやっぱりその時期にやろうと思ったのは、（１年次）前期後期の部分はお金（学費）払ってたんで、だから（辞めるタイミングとしては２年生前期の学費納入の前の）そこかなと思って、親と話し合ってって感じでした」と語った。その話し合いの際には、留年や休学と言うことも視野に入れられただろうと筆者には思えた為、どういう話し合いだったのか尋ねると、「あんまり記憶にはないですけど」という返事が返ってきた。その語りの際のβさんは苦痛そうな表情を浮かべていた。少しの時間だけβさんは口ごもり「ちょっと大学が辛かったので非常に」と語り出した。具体的にどんなことが辛かったのか訊くと「イメージしていた大学生活じゃなくてやっぱり何か課題も多かったりっていうのは…結構精神的に（辛かった）」と。βさんはアルバイト先で人出が足りない時に応援を頼まれることが多く、新年は連続勤務で１日８時間くらい働いていた。新年のアルバイト疲れが残っていたこともあり、大学の進退について語るときや資格専門スクールの話題では単調で表情が硬かった。しかしながら、現在どのような繋がりの中にいるのか訊いたところ、高校時代からお世話になっていた（途中途切れていたものの昨年の秋ごろから緩やかに行きだした）若者自立支援ルームに現在は週に一回行って過ごしていることを語ってくれた。そこのことを話す時は「例えば何か自立に向けてスポーツ行ったり、そういうプログラムができるんですよ」「ライブが3月の後半に予定されててドラムやります。スタッフと一緒に。そして午後は〇〇神社に歩いて行って、みんなで初詣に行くんですよ」と明るい表情で楽しそうに語っていた。

〈将来への展望〉

これからの展望を訊くと、「とにかく試験を頑張って、受かりたい」ということを述べていた。

【学校教育後に移行支援機関を経た２名】

Xさん：〈学生から社会人となった現在までの概要〉

Xさんは地域の特別支援学校（高等部単独校）を卒業後、A事業所に進むことを決めた。A事業所への入所理由について、見学に来た際事業内容やルールが自分に合っていたこと、もう一つの別の事業所と比較しても自分にとって魅力を感じたことを挙げた。A事業所での自立訓練事業と就労移行支援事業の経験を経て、3つの実習先を試した結果、現在の仕事が最も自分に合っていると感じ就職を決めた。業務内容は小売りスーパーでの商品陳列や接客を行っており、仕事と並行して自身でビジネスマナーの勉強も続けている。

〈クライシス期〉

人生のクライシス状況について伺ったところ、中・高生時代は特に友人関係や学校生活の困難についての話があった。中学時代は威圧的な担任への恐怖心から不登校状態になったが、高校からは授業も分かり易くときどき休みながらも登校していた。しかし誰にも心は開けず常に独りぼっちであった。「高校に入ってからは教師はほとんどそういう人はいなくて、むしろ優しい人はいるけど、あんまり心を開けなかったっていうのはあって」や「誰とも話せずにずっと携帯いじったり」、「やっぱり

友達作りたいなと思っても、多少喋ってもやっぱこの人無理だなって感じで」、というような語りで当時の孤独な気持ちや不安感を語ってくれた。他にも「勉強もやらないで友達もいなくてずっと一人で携帯いじって、ゲームしての時代だったので、高校3年間。本当にその先のことは不安でしたね」という語りから伝わってきた。

〈クライシス期からの脱出〉

A事業所へは周囲の勧めで行くことになり、最初は遅刻しながら何となく通っていたが、１年くらい経つとカードゲームを通じて人と話す機会を得た。徐々に遠足やイベントに参加することでさらに友人関係が広がっていった。そのためA事業所での生活が楽しくなっていき、その時のことをXさんは「最初のお友達のおかげでA事業所へ毎日行くようになってきて」と語っていた。自立訓練事業所に入所して２年目くらいから友達ができ、コミュニケーション能力が向上していったことを強調していた。Xさんは「（友だちが）自分が勉強することを頑張って応援してくれたことですごく嬉しくて」と話していたように、友だちができたことで全てが好転し始め、勉強も就職活動も頑張ることができた。就職後もビジネスマナーの勉強を続けることを決意し、インタビュー当時A事業所のサポートを受けながら資格取得を目指していた。XさんはA事業所で得られたかけがえのない友人関係やコミュニケーション能力の向上が現在の自分を形作っていることをお話された。「ここに来てなかったらずっと寂しい思いして、ずっと家で一人で遊んだりとか、ずっとこのままかなって勉強しないでって、そういう不安があったりとか、…本当にそうなっていたかもしれないですね」、「本当にここ来て、勉強もこうしてビジネスマナーとかあとは簿記とかやったりとかして、そういうことも本来なら絶対やらないですね」、「ここに来てからいろんな勉強を自分からやるようになってきて、そこから友達関係、コミュニケーションとか人間関係もそこでいろいろ勉強したりとかして、こう言ったら相手は傷ついちゃうんだ、こう言ったら相手は喜ぶんだって感じで。そこでいろいろ友達で勉強したりとか学ぶ機会が本当にあって」と語られた。

今ではA事業所での経験が自信につながり、将来への希望や意欲、向上心をもって生活を送られている。

〈将来への展望〉

現在は一人暮らしを段階的に始め、実家へも行き来しているが、そのうちあまり実家に行かず一人暮らしができるようになっていきたいことや、趣味の追求と専門学校への進学の夢など、具体的な展望を抱いていることが語られた。XさんはA事業所での生活の中で停滞状況から見事脱し、勉強や就職活動にも意欲的に取り組むようになっていくことができた。Xさんが社会人として適応していく過程における原動力、そして自信をもって夢を語ることのできる姿勢の背景には友達の応援が大きかったことが分かった。

Yさん：〈学生から社会人となった現在までの概要〉

Yさんは高等特別支援学校を卒業後、都内通信制高校サポート校へ進学し、その後Ａ事業所に進むという進路を選んだ。学び直しとご自身の求める高校生活を取り戻すために通信制サポート校に入学した。サポート校卒業後は体調管理のためＡ事業所に進むことにした。A事業所を卒所後は小売りスーパーでの品出し・商品陳列業務（Xさんと同じ職場の先輩に当たる）に従事してちょうど２年を経過したところである。

〈クライシス期〉

高等特別支援学校では思うような学校生活を送れなかったことから２年生の時、退学を意識し始めた。きっかけはクラス替えで環境が大きく変わり、仲の良かった友達とも疎遠になりクラスへの居づらさや自分が思っていた高校生活でない空虚感から学校を辞めたいと思うようになっていった。Yさんの望む高校生活とは「やっぱり文化祭とかみんなで何かの行事をやるとか、そういうのをやってみたかったですし」という表現や、高等特別支援学校で実現できなかった思いと次の高校生活への期待としては「やっぱやってみたいこともあるし自分で学べなかったことも多いと思ったり、別のところなら誰も自分を知らないところで自分の素を出すっていうわけではないですけど、今までの自分とは違った生活ができるんじゃないかというふうに思いまして」と述べられたことから伝わってきた。この決断に至るまでの時期がまさにＹさんにとっての人生のクライシス状況であったそうだ。学校を辞めたい旨をまずは保護者に相談し、その後担任にも相談した。ところが卒業までは在籍するよう熱心に担任に促され、その際はYさんが折れて高等特別支援学校を卒業するに至った。

〈クライシス期からの脱出〉

しかしながら辞めたい思いを保護者と担任に伝えて以降は、在学中から通信制高校サポート校への進学について真剣に考えて行動に移していった。この時の決断は、Yさんにとって大変大きなもので、これまでは人についていくタイプだった自分から自分の意思で熟考し行動するという変革を遂げるものであった。通信制高校サポート校への進学を決める際には保護者とよく相談し、保護者は見学にも同行してくれた。とはいえ当時、親に学校を辞めたいと言う時は不安だったそうだ。しかし、対立することになっても大丈夫なように対策を立てるのがYさんの長所なのでそれを活かしてシミュレーションをし

てから親と話し合いをした。その時のことを「こう言ったら話し合いの場になるかもしれないっていうのはシミュレーションというわけではないですけど、ちょっと頭の中で想像して、実際にそういうふうに親と話はしてたので、それでも対立する場面はありましたけど、うまく話せる機会が多かったので」と話された。その結果、保護者も協力してくれるようになり、事がうまく進んだそうである。Yさんは自分のことをよく分析しておられ、「私も自分の長所とも考えてはいるんですけど、いつも悪い方向に考えてしまうっていう短所もありますけど、それを長所に置き換えていつも大体の行動に保険をかけるというわけじゃないですけど、ここでこう言ったらこうなるかもしれないから、その場合の逃げ道ってわけじゃないですけど、対策としてこういうことを用意しておこうみたいな。そういう保険を立てて悪いことが起こっても大丈夫なように対策をするっていうのは私の長所の一つでもあると思ってますので、それをうまく活かして人との話し合いもやってる時がありますね。」とご自分の長所短所を把握してお話してくれた。ご自身で「一から考え直して自分で希望の学校を選び直した、それが人生の分岐点であり、成長の機会となった」とYさんははっきりと述べられていた。

通信制高校サポート校では楽しい高校生活を過ごすことができ、A事業所では人間関係についてもたくさん学ぶことができ、それが今の仕事にも役立っているそうだ。例えば職場でリーダーシップを発揮する機会に意図せず遭遇し、その事態にはA事業所での生活経験が生かされ、その役割を果たすことができた。職場からの信頼も得られるようになり、今では週に1日準リーダーのようなポジションを任されるようになったそうだ。A事業所での生活経験では、トイレ掃除の話が挙がった。

「（A事業所での生活経験が生かされているのは）日々のプログラムもありますし、例えば全員で行事を作るとか、それこそ掃除の時間とか。掃除の時間とかに誰がどこをやるかっていうのは結構考えてたことが多いので、そういうあたりの経験がやっぱ大きいのかなって思います」と話された。誰がどこをどのような工程で掃除を行うかを考えて各自が責任をもって仕事に取り組んだ。そのような経験が、突然リーダーの代打として手腕を発揮できたことに繋がったのではないかとYさんはA事業所での経験を振り返った。また、工作活動などの際に、周囲の通所者からどのようにやるのか手伝ってほしいという要請の声があちらこちらからYさんにあり、それに順次対応していったという語りも聞くことができた。このエピソードからは、Yさんが人から頼りにされることでご自身に自信をつけることができる経験を積むことができたことも垣間見ることができた。

〈将来への展望〉

将来は今の週4勤務から週5勤務にできるように頑張っていきたいという抱負も語られた。

5．考察

今回のインタビューで4人のライフヒストリーを聴かせていただき、それぞれのクライシス状況とそこからの移行経験について見てきた。4人の内、αさん、Xさん、Yさんの3人はクライシス状況から脱し、現在は自身が納得する人生を送っていると言えよう。ではなぜ3人がクライシス状況の停滞期から次の段階へ進もうという気持ちを湧き起こして行動していくことができたのだろうか。そこに共通して見えてきたものが「自己回復力」である。この自己回復力は臨床心理研究者のウォーリン夫妻が著書『サバイバーと心の回復力』で“リジリアンス”として紹介している。リジリアンスとは「人生の初期に苦しめられた困難から回復する力であり、その困難は並外れた強さと勇気を生み出す土壌でもある」と述べている。

（ウォーリン夫妻、2002年）彼らは困難をもっているサバイバーの自己回復力を信じてチャレンジ・モデルを採用し、セルフの周りを7つの保護的なリジリアンスが取り囲んでいる図を用いて自己回復していく過程を説明した。このモデルに照らし合わせながら今回のインタビューイーの自己回復の過程を見ていきたい。

αさんは3年間での卒業ができないという現実に直面し、そこで祖母から叱咤激励される。怒られるばかりでなくちゃんと優しい励ましと共に祖母にかけられた言葉がαさんに染み渡り、そこから彼女は変わっていった。この時の変わろうという気持ちを湧き上がらせた背景には、祖母によってじんわり温めてもらった経験が彼女のリジリアンスの「結びつく」という「くさび」（ウォーレン夫妻の言葉）として姿を現したからではないだろうか。これまで家庭に居場所がなく安心感を得られない彼女を祖母はいつでも優しく受け入れ、ご飯を食べさせてくれたり色々な話を聴いてくれたりした。学校にも行かず何もやる気が起きず「どん底まで落ちた」と彼女自身言っていたが、そのようなクライシス期でも祖母と過ごす時間の中で彼女は次第に自己を取り戻していったのだろうと思われる。このような時間があったからこそ祖母

以外の人にもお世話になっている自分というものにも気づくことができたのだろう。さまざまな人を頼り（「募集する」くさび）、自分は大切な存在なのだと自覚できる体験が「愛着をもつ」という関係性の中のさらなるくさびを打つことになり、自己回復力を高めていってくれた。そして彼女の場合「今度は自分が恩返ししたい」という気持ちが湧きおこって、そこからは近い未来の目標（高校卒業）とそのために今自分が何をしなければいけないかという現実とも向き合い、実行に移していくことができた。そして社会人となった彼女は、実家とも適度な距離をとって経済的にも自立できたことで「独立性」というリジリアンスも味方にできた。現在、新たな目標や夢を抱きながらたくましく生きている。

Xさんは真の友達を得たいと思いながらもなかなかそのチャンスにも恵まれず、自ら積極的に人と関わろうともせず、ずっと孤独であった。そんな時にディズニーランドへの遠足を迷っている他者から自分が頼られたということがきっかけとなり、友人を作ることができた。人と話すことや関わっていくことが苦手だったXさんが、自ら話しかけて誘おうと思えたのは、自身の経験やアドバイスが人のために役立つと思えたから行動できたのではないか。やはり他者から頼りにされたり感謝されたりすると人は嬉しいものだ。そのような感情に働きかけるような刺激がXさんの気持ちを解きほぐし、人と関わることの楽しさを実感し交友を深めていくことに繋がったのだと思われる。Xさんがアドバイスできた背景には家族と行ったことがある経験が生かされた。Xさんは何回かディズニーランドへ行ったことがあり自信をもってアドバイスしていたことから、とてもいい思い出を家族と作れていたのだろう。このエピソードからも現在のXさんの段階的一人暮らしを家族がサポートしてくれているお話からも家族関係が良好で、ご家族がXさんの自主性を尊重して支えてくれていることが伺えた。そして、ディズニーランド遠足でできた友人もXさんの勉強や就職活動を応援してくれた。この友人から「応援されていることがすごく嬉しかった」というXさんの言葉が表しているように、これまで孤独で将来についても不安だったXさんの心を家族や友人が少しずつ温め自信をもたせて、自己回復させてくれたのだろう。Xさんにおいても周囲の人が自分へ向けて労り励ましてくれる「関係性」のリジリアンスによって自己回復されると、今度はやはりそのパワーが原動力となって本来の自分はこうありたいとかこんなことに挑戦してみたいという気持ちが湧きおこってくる。このようなXさんの「探索する」「取り組む」「生み出す」というくさびは「イニシアティヴ」となって成長を促進しリジリアンスも高めてくれた。Xさんに将来の展望を伺うと、次から次へと今まで封じ込めていた気持ちが湧き上がってきているかのように挑戦してみたいことをいくつも伺うことができた。

Yさんの場合は、高等特別支援学校を退学して新たな道を進みたいと保護者・担任に打ち明けたところから停滞状況から次への行動が始まったと思われる。Yさんはその時の状況から脱し新たにやり直したい、そのためには一から自分で考えて決めていくことが大事だと気づいた。つまり自己覚知をした上で自身の気持ちを尊重できたことが大きかった。また自分がどうしたいか、どういう人生を送っていきたいかという目的を明確にできたことで、次に進むべき方向性も見えてきた。これらはXさん同様「イニシアティヴ」のリジリアンスと言える。そして、立ちはだかる困難（親の反対）も想定しそれに対処することができ、一方で対処困難な場合では（担任からの卒業まで頑張れという説得）自分が折れつつも、心の炎は灯したまま次のステージへ向けて着実に準備を進めていくことができた。これらの対処は「洞察」というリジリアンスが生かされている。どう話せば親は理解してくれるか、今はどう行動することが担任も納得させ自分も目的を果たせるかということを冷静に考え行動できた。これはYさんが子どもの頃から培ってきた「感じる」「知る」「理解する」というくさびを「洞察」というリジリアンスとして発揮できたことによるものだ。クライシス状況から新たなステージへ向おうとするとき、Yさんのケースでは担任の説得は更なる困難ではあったがそれを乗り切っていくためには自分の強い信念に加え、絶対的に信頼している保護者が応援してくれたことも心の支えとなったはずである。主体的に行動しているのはあくまでYさん本人ではあるが、Yさんの保護者はしっかりYさんの気持ちを受けとめ、学校見学などには同行するなどYさんの新たな挑戦を応援してくれていた。応援してくれる伴走者がいることでYさんは「関係性」のリジリアンスでも力強く自己回復していくことができたのだろう。伴走者がいてくれるのは、困難な状況であるほど行動を続けていく上で重要な条件であると考えられる。

このようにこれら３名がクライシス状況から次の目標に向かって行動に移していけた背景には、本人のやる気や気力だけに依拠するものでなく、その気持ちを湧き上がらせるためのエネルギー源として、他者からじっくりゆっくり蓄積されて得てきた経験（「関係性」のリジリアンス）が特に大きいと言えるのではないか。この経験によって自己回復力が湧きおこり、失いつつあった自己をもう一度回復し取り戻していこうという作用が起きる。そしてさらに他の６つの保護的リジリアンスも加わ

った時には、傷つき困難な状況にある自己（セルフ）は力強く自己回復していく可能性を秘めている。あくまで行動を起こすのは本人ではあるが、この他者に癒される経験というのは本人が次の行動を起こそうとする気力を出す上で極めて大きいのではないかと思われる。

βさんにおいては、停滞期に充分に自分と向き合う間もなく外的要因（学費納入期限などがあったこと）によって退学という選択を行った。自分で目的をもって具体的に行動していったというよりも行動せざるを得ない状況であったため、現状は本人が真に求めて考えた結果の居場所であるとは言い切れない。現在βさんが資格取得の為のスクールに行っている状況は、Xさんが漫然と移行支援事業所へ入ることにした経緯と重なるものがある。βさんが自分の真の気持ちと向き合い、時が来れば事は好転していくと思われるが、その機に至るよう充分に考えるための時間と他者から癒されることで自己回復していく経験、その他保護的リジリアンスの気づきと獲得が必要と考えられる。

最後に専門的移行支援を受けた者と受けていない者との比較で言うと、XさんとYさんにおいては移行事業所での様々なプログラムや生活経験が、その後の社会人生活の中での不測の事態においてもしなやかに生きる力として生かされていることが見てとれた。質問の③のA事業所でのどのような経験が現在の成長に活かされているかという質問に対し、Xさんは「人間関係でこういうことを言うと相手は傷ついてしまうという事を友だちができてから勉強して、コミュニケーション能力を高められた」と述べていた。また、職場で困ったことがあった時は、上司に相談するようにして対処しているそうだ。他にも状況に応じて柔軟に対応されていて、店内での商品の運搬や陳列がXさんの主な業務ではあるが、お客さんから何か聞かれた時はそれに対応したり、レジ担当が不在の時は呼びに行ったりなどもしているとのことだった。Yさんは分からないことがあったら自分一人で抱え込まずに上司などに相談するという学びなどが役立ったことを挙げた。それに加え、小学生時代に親の職場に連れて行ってもらった経験が大きかったことも話された。その幼少期の実地の学びがA事業所に来てからの社会についての学びや人間関係についての学びと有機的に結びついて社会への認識を深め実感をもって学びとることができたと語っていた。このような経験や学びが、社会に出てトラブルに遭遇してもしなやかに生きる力となって歩めているのだということが伺えた。一方専門的移行支援を受けていないαさんであるが、現在の職場環境が恵まれていることもあり、うまく周囲に頼り頼られてさらなるリジリアンスを高めている最中であった。そのようなことは、本人が売り場を任されて不安だったものの「αさんならできるよ」と同僚に励まされたことを語ったエピソードから伝わってきた。まさにエンパワメントしてくれる同僚が彼女の自己効力感を高めてリジリアンスを支えてくれているという事例である。βさんにおいても２回目インタビューで母親の他にも伴走者となり得る若者自立支援センターの職員との交流の話も聴くことができ、大変心強く思った。また既に１回目のインタビューの際に、アルバイト先で頼りにされている事や旅行先での人々との触れ合い経験など、エンパワメントされ自己効力感を育んでいる最中であることも伺えた。

まとめとして、４者に共通することは本人の持っている資質もそうだがそれだけでなく自己回復をエンパワメントし下支えしてくれる伴走者の存在は大きいということだ。この伴走者に仕組みとして付いてもらえて、様々な効果的プログラムを受けられるのが移行支援事業所であるが、社会のさまざまな場面で伴走者となり得る存在が存在すれば人は育ちあえるという事も４者のライフヒストリーから伺えた。

６．今後の課題

今回は４名の当事者インタビューによりクライシス状況から次の行動を起こす過程の際にどのようにして変容が起こり得るのかを浮かび上がらせた。当事者が変容したいと思う気持ちが立ちあがってくる背景には、エンパワメントしてくれる伴走者がいてその関わりによって当事者は自己回復していくことが挙げられる。自己回復していく過程の中で自己を見つめ真の自分の願いとなる目標を見つけられた時、現実とすり合わせて何をすべきか理解し行動に移していくことができる。しかしながら、その自己回復を支える伴走者へのインタビューは今回行えていなかった。今後機会があれば伴走者側の視点や思いも聴いて多角的に捉えていきたい。

参考文献

・厚生労働省「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」、2010年

・近藤直司「思春期ひきこもりにおける精神医学的障害の実態把握に関する研究」『思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究』、2010年、p74

・大河内明・忠高栄、2015年、「特別な医療ニーズのある子どもを評価する際の日本における『気になる子ども』概念の有用性」『Ann Nurs Pract 』

・『サバイバーと心の回復力　―逆境を乗り越えるための七つのリジリアンス―』S・J・ウォーリン/S・ウォーリン著、2002年、金剛出版